

プログラム

- 15:00 開場
15:30 開会／開会挨拶／堀江町長挨拶／来賓挨拶
15:50 趣旨説明(100年経営研究機構 事務局)
16:00 基調講演
時代に求められる日本の「商人道」(後藤 俊夫)
16:55 キーノートスピーチ
近江商人の陰徳善事 日野商人の事例(岡井 健司)
伊勢商人の企業経営 三井家の事例(下向井 紀彦)
大阪商人のひとづくり 懷徳堂の事例(湯浅 邦弘)
17:40 パネルディスカッション
日本の三大商人に学ぶ「商人道」の実践(登壇者4名)
18:50 閉会・集合写真撮影
19:20 懇親会
21:00 懇親会終了

100年経営研究機構のご紹介

一般社団法人100年経営研究機構は、「100年経営を科学する」をコンセプトに、創業100年を超える長寿企業が実践してきた長寿経営を科学し、持続可能な経営に資する原理原則や叡知の探求とその普及啓発を行うことを目的に2015年に設立されました。

長寿企業のデータアーカイブの構築や研究会、視察等を通じた調査研究と講演や出版等の情報発信を通じた普及啓発を行っています。会員の皆様を中心にこれらの活動にご参加頂き、100年経営を科学する同志とともに活動を推進しています。



登壇者のご紹介



一般社団法人100年経営研究機構 代表理事
日本経済大学大学院 特任教授

後藤 俊夫

1942年、東京都生まれ。東京大学経済学部卒。大学卒業後NECに入社し、1974年、ハーバード大学ビジネススクールにてMBA取得。1999年NECを退社。ファミリービジネスと長寿企業の研究者として活動を開始。2015年、一般社団法人100年経営研究機構を設立。代表理事に就任。



日野町教育委員会生涯学習課 歴史文化財担当課長
近江日野商人ふるさと館 館長

岡井 健司氏

1970年、滋賀県生まれ。関西大学大学院文学研究科博士後期課程修了。専攻は日本近世史。日野町教育委員会町史編さん室を経て、現在、日野町教育委員会生涯学習課歴史文化財担当課長・近江日野商人ふるさと館長。



公益財団法人三井文庫 主任研究員

下向井 紀彦氏

1983年、広島県生まれ。2011年、広島大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。同年、公益財団法人三井文庫入職。2013年、博士号取得（文学）。専門は近世流通経済史。主に三井越後屋の仕入や販売、三都（江戸・京都・大阪）と地方の流通や交通について研究。



立命館大学教授
大阪大学名誉教授

湯浅 邦弘氏

1957年、島根県生まれ。大阪大学大学院修了。一般財団法人懷徳堂記念会 学術文化専門委員。専門は中国思想史及び懷徳堂研究。『増補改訂版懷徳堂事典』等、懷徳堂に関わる著書を多数執筆。2025年より立命館大学教授。

100年経営研究機構では、世界から注目される長寿企業の経営を共に学び、100年経営を科学する同志を募集しています。

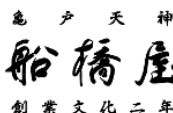
会員制度の概要・お申し込みはこちらから

お問い合わせ

TEL : 03-6416-5789
MAIL : info@100-keiei.org
HP : https://100-keiei.org/



「第1回商人道サミット」は、下記の企業等に協賛いただき開催いたします。



第1回 商人道サミット

日本の三大商人に学ぶ『商人道』の実践

2025年5月23日（金）

日野町 町民会館 わたむきホール虹

共催

一般社団法人100年経営研究機構

日野町

商人道サミットとは

持続可能な社会経済の実現が求められる現代において、企業には多くの役割が期待されていますが、同様に、ひとり一人の意識と行動の変化も必要とされています。そのような時代的背景を踏まえ、日本は100年以上続く企業が最も多い「長寿企業大国」として、世界から注目されています。持続性を体現してきた長寿企業の背景には日本で培われた商業道德と経営倫理、日本の「商人道」があると我々は考えています。そして「商人道」こそ、日本が世界に発信する価値のあるものだと考えています。そこで、「商人道」の現代的意義について理解を深め、その普及啓発を推進する機会として開催するのが「商人道サミット」です。

「第1回商人道サミット」のテーマは、「日本の三大商人に学ぶ『商人道』の実践」です。

商人道とは何かについて基調講演で理解を深め、実際の商人の活動について3名の専門家にキーノートスピーチでご紹介いただきます。そして4名の専門家のパネルディスカッションを通じて、異なる商人群の多岐にわたる商人道の実践とそこに共通する考え方、そしてその現代的な意義を探ります。近江商人・伊勢商人・大阪商人という日本の三大商人を「商人道」という観点で一体的に理解しながら、現代の経営や経済人としてのあり方に生かすポイントを見出すことが狙いです。

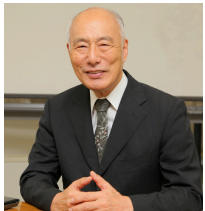
日野町長のご挨拶



日野町長
堀江 和博

「第1回 商人道サミット」のご開催、心よりお喜び申し上げます。
記念すべき第1回目のサミットを当町で開催いただけることは、近江日野商人の歴史を継承する私たちにとって、この上ない喜びです。皆様を心より歓迎申し上げます。
一般社団法人100年経営研究機構の後藤代表をはじめ関係者の皆様には、商人道の現代的意義を広く共有しようという志に、深く敬意と感謝を表します。
日本は世界で最も長寿企業が多い国です。その背景には「商人道」という独自の思想・哲学があります。商人たちは単に利益を求めるだけでなく、社会全体の発展を見据えた倫理観を持ち、その精神は現代にも大きな示唆を与えてくれます。
本日は、近江・伊勢・大阪の三大商人の実践に学び、先人たちの知恵を現代に活かす機会となることを願っています。日野町は今後も、先人の精神を大切に守りながら、その現代的解釈と実践に取り組んでまいります。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

なぜ、商人道なのか



一般社団法人100年経営研究機構 代表理事 / 日本経済大学大学院 特任教授
後藤 俊夫

100年経営研究機構は「100年経営を科学する」を続け、創設10周年を迎えます。
長寿企業は日本の宝物であり、商業道德と経営倫理の着実な実践こそ長寿企業大国日本を実現している最大の長寿要因として、私たちは国内外に強調して参りました。持続可能性が強く求められる今、企業の持続的発展に向けた強い希求及び自らの利益を短期的に追い求める株主資本主義とは異なる資本主義の探索が加速しております。そして、複雑かつ多様な課題や変化に直面するなかでも企業を存続させるロールモデルとして、近年とみに海外諸国から日本の長寿企業が注目されるとともに、その経営における倫理的側面に関する討議も活発化しております。
しかし、長寿経営の背景にある倫理的要素が現代社会に示す可能性と重要性は、国内では十分に理解されているとは言いがたいのが実態ではないでしょうか。その理由の1つは、倫理的要素に関して「儉約齊家」、「先義後利」、「論語と算盤」、「三方よし」、「企業は社会の公器」など様々な表現が存在し、内容も広範なものであり、統一的に体系化されていないためではないかと考えられます。そこで、改めて倫理的要素の統一的コンセプトとして「商人道」こそ最も相応しいと考え、「商人道」の定義と沿革、今日の背景及び今後の展望について、基調講演でお話させていただきます。

キーノートの概要

「近江商人の陰徳善事 日野商人の事例」



日野町教育委員会 生涯学習課 歴史文化担当課長 / 近江日野商人ふるさと館 館長
岡井 健司 氏

近江商人とは、江戸時代において、近江国に本宅を置いて他国稼ぎをした商人である。持下り商品の行商、出店経営、地域間価格差を利用した販売、共同経営の導入を特色とし、近代的な商業経営にいち早く到達した商人として評価されてきた。日野商人は、近江商人のなかでも日野を出身地とする近江商人である。

近年、「三方よし〜売り手よし、買い手よし、世間よし〜」が近江商人の商業理念を表す言葉として注目を集めている。「三方よし」に関連する日野商人の家訓としては、初代中井源左衛門が著した遺訓「金持商人一枚起請文」が注目され、これは富の秘訣を「始末」と「陰徳善事」とであると説く。すなわち、利益を「世間（地域）」に還元することが肝要であり、それがひいては家の永続につながるという考えである。

この精神のもと、日野商人は政治・経済・教育・文化など多岐にわたる分野で「陰徳善事」に励んだ。そして、関わる者全てが当事者意識を持つことを重要視し、例えば寄付行為をする際、一人が全額を拠出することなく、皆が少しずつ負担し合うことを常とした。これは、日野商人の特徴である「大当番仲間」の構築にもつながっており、業種を問わず地縁で結ばれた商人が集まり、合議制で方針を決め、互いの商いを支援し合うという画期的な仕組みを生み出した。「陰徳善事」を旨とした日野商人の商業理念が作り上げた一つの到達点であったと言える。

「伊勢商人の企業経営 三井家の事例」



公益財団法人三井文庫 主任研究員
下向井 紀彦 氏

三井は伊勢松坂を出身とする豪商で、近世を代表する「江戸店持ち京商人」の一つである。1673年、元祖・三井高利は子どもたちとともに江戸日本橋の本町一丁目で呉服店「越後屋」を開業した。1683年に駿河町に店を移したのち、呉服業と両替業を両輪として事業を展開し、高利没後も子どもたちが一体的に事業を継承して発展していった。1710年代、不況や子どもたち世代の高齢化などの重なった三井において、世代交代が課題となった。家と事業を統轄する「大元方」を設置し、家法「宗竺遺書」を定め、各種の記録や規則を整備するなど、事業体としての体制を整備して次世代への継承に成功し、以後近世を通じて三井は有力な豪商として存在し続けた。

高利は自ら事業精神や経営哲学を書き残しておらず、高利の子どもたちの作成した記録から断片的に推測できる程度である。この中に、遊興を慎み商いの道を唯一の楽しみとすること、商いの道とは新たな取り組みと工夫にあること、商いの道に長けた者の経営判断が重要であること、商いの根本は養生であることなど、「商の道」「商の本」に言及したものもある。これらは商売に対する誠実で正直な心がけや、三井の投機的な事業を避ける方針にも通じると評価されることもある。商売の経験から培われたと思われるこれらの考え方は、以後も規則などを通じて、近世の三井同族や重役に引き継がれていったものと思われる。

「大阪商人のひとづくり 懷徳堂の事例」



大阪大学名誉教授、立命館大学教授
湯浅 邦弘 氏

大阪商人の精神的基盤を形成した懷徳堂について紹介する。懷徳堂は、江戸時代の中頃の享保9年（1724）、大阪船場の有力町人「五同志」が創設した漢学塾である。

その特色は、1）町人のための学校、2）商業活動の基盤としての道徳を重視、3）時代を先駆ける町人学者の輩出、4）時の政治（寛政の改革）への影響、5）近世から近代への橋渡しの提言、などである。また、幕末維新の混乱を乗り切れず一旦閉校した後、明治時代の復興運動を経て大正時代に再建されたのも大きな特色であろう。

このうち、大阪商人のひとづくりに直接影響を与えたのは、儒教經典の教学によって「義」を尊重した点である。渋沢栄一『論語と算盤』が提起する問題は、すでに商業都市大阪では十分に意識されていた。また、治水・架橋などインフラ整備を商人たちが率先して行ったことも大きな特色である。後世に徳を遺すという儒教的理念を実学として展開したのである。